

清野 裕・門脇 孝・南條輝志男(監修)
大平雅美・石黒友康・野村卓生(編集)

糖尿病の理学療法

評者 内山 靖

(名古屋大学大学院医学系研究科)



この度、糖尿病治療に携わってきた理学療法士の編集により『糖尿病の理学療法』が刊行されました。

これまで理学療法の領域は、主に神経系、運動器系、小児・発達、内部障害に区分されてきました。このうち、内部障害は呼吸、循環、代謝に細区分されていましたが、近年では、対象者の増加、運動療法の治療的根拠の蓄積、保険制度の変更などが相まって、それぞれの領域で積極的な取り組みが加速しています。糖尿病については、以前から、薬物・食事・運動の3つの療法を合理的に組み合わせることが重要とされ、運動がインスリン抵抗性に与える影響などについて、多くの研究が進んでいます。運動療法と理学療法の違いについての検証は十分に進んでいませんが、合併症を有する対象者や重症者への理学療法への期待は年々高まっていました。

このようななかで、2013年に日本糖尿病理学療法学会が設立され、現在、3,015名(2015年4月時点)が登録しています。この機会に、これまでの糖尿病の理学療法の現状と展望を書籍としてまとめられたことは、誠に時機を得た意義深いものと存じます。

本書は、総論と各論の2部構成で、まず、人類の進化を踏まえた広い視点から糖尿病を捉え、分子生物学に加えて、療養、チーム医療という社会のなかでの医療について示唆に富む内容が展開されています。総論では、生活習慣病、非感染性疾患(non communicable diseases: NSDs)全体に通じる患者・療養者中心の視点に立った論旨で、医療者のプロフェッショナリズムを涵養するうえでの共通の考え方が示されています。

各論では、理学療法の枠組み、運動と生活活動を含んだ身体活動、合併症に対する理学療法に続き、行動科学的な理論を踏まえた個別・集団指導について言及されています。また、高齢者については独立した章で解説を進め、最後は糖尿病治療に携わる理学療法士に有益な11のトピックスについて紹介されています。

各章は、それぞれの専門職のエキスパートが平易に記述しており、最新の知見を含めた内容になっています。また、メジカルビュー社の特徴でもある精練された図と写真が見やすく、テキストとしての質感やレイアウトは上品な仕上がりです。

糖尿病の治療の目的は、血糖のコントロールではなく、合併症の発症と進行を予防し、健康寿命を延伸することにあります。この目的をまっとうするためには、チーム医療が不可欠であり、本書監修者の言葉にもあるように、それぞれの専門職がどのような役割を果たすかは、それぞれの専門職自身が明らかにする必要があります。

本書は、幅広い内容がコンパクトにまとめられており、学生や初学者にとって非常によいテキストであり、専門領域以外の医療者や、この領域を指導する際の手引き書として専門家が活用されることをお奨めします。

● B5判・352頁・2色刷(一部4色)

定価(本体5,200円+税)

メジカルビュー社刊、2015年